

| 研究会・部会・ 委員会・分科会 | 活動ビジョン・ゴール | 年度目標 | 進捗・課題 | 予定・行動計画 | 関連団体等 |
|--------------------|--|---|--|--|--------------------------------------|
| 食品安全研究会 | | | | | |
| 食品微生物研究部会 | 食品産業会が抱える食品微生物関連の共通課題を、部会員が協同で(企業の枠を超えて)研究し解決を目指す。食品関連企業の微生物担当者が業務上の悩みや課題を相談・共有し相互解決できる場として機能する。当部会の研究成果を含む食品微生物に関する安全性等の情報について、広く周知活動を行う。 | 部会員が集まり定期的に交流や情報交換を行える場としての部会運営の再整備(アフターコロナ対応としての集まる場の整備)新規研究PJの立案および他機関との積極的な連携の実施 | 分科会活動 (1)芽胞菌研究分科会 ・活動体制の見直しおよび情報交換を実施中。 ・分科会リーダーの変更(三菱ケミカル 関本訓士)。 (2)MALDI-TOF MS 研究分科会 ・2023年の連携方針について打ち合わせを実施(5月31日、分科会リーダー(佐藤)のみ参加)。 MALDIスペクトルデータの解析技術について情報交換を実施することで合意し、具体的に進めていく予定。 (3)チルド勉強会 a. ボツリヌス菌接種試験活動 ・活動なし(追加試験について日本缶詰びん詰レトルト食品協会にて調整中)。 b. 耐熱性試験法検証活動 ・第4弾試験考察のため、使用芽胞液における芽胞率確認等の追加データを取りまとめた。 | 各分科会の研究活動に加え、各社が共通に抱える食品微生物関連の課題について、部会全体でのディスカッションおよび関連団体等との連携を通じ、課題抽出と解決策の検討を行う。 | (公社)日本缶詰びん詰レトルト食品協会 (独)製品評価技術基盤機構 |

| | | | | | |
|----------------------------------|---|---|--|---|---|
| | | | <p>(4)国際整合性のある食品微生物リスク管理研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> 以下の読み合わせおよび和訳を継続実施中。 <p>FAO/WHO Microbiological Risk Assessment Series 24 "Statistical Aspects of Microbiological Criteria Related to Foods"</p> | | |
| 食品リスク研究部会 | 食品の安全性評価の考え方を学び、その普及に努める。 | <p>① 食品リスク研究に関する勉強会を3回以上開催し、情報発信する。</p> <p>② 「ナチュラルミステイク」の情報発信。</p> | <p>5月25日(木)に部会をZoomで開催した。</p> <p>① 2023年度の勉強会についてオンラインでWG-MTGを1回開催し、スケジュール、テーマ、講師の進捗を確認した。</p> <p>② 「ナチュラルミステイク」を献本したジャーナリストや食品リスク研究者にアンケートを実施した。</p> | <p>① 講師の方々と調整し、勉強会のスケジュールを決定していく。8月9日(水)「フードテック(昆虫・培養細胞食品)の安全性の考え方」を、9月29日(金)「微生物や微生物を用いた食品の安全性」の勉強会開催を調整している。</p> <p>② 献本先の先生方に実施したアンケートを集計し、情報発信につながったかを確認する。</p> | |
| 香料研究部会 | 食品香料の性質と安全性等に関し偏向の無い科学的な調査研究を行う。食品香料に関する正しい科学的共通理解を産・官・学に普及させる。 | — | 特になし。 | — | — |
| 食品領域の動物実験代替推進プロジェクト (AAT プロジェクト) | | | | | |

| | | | | | |
|-----------------------------|--|---|--|---|--|
| <p>全体進捗</p> | <p><活動目的> 1) 動物に依存しない、毒性発現機序に基づいた、ヒトへの予測性のより高い評価アプローチを確立し、食品の安全性および機能性評価の精緻化・効率化を進展させること。 2) 動物愛護の世界的潮流の中で食品領域の取り組みを加速させること。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・研究 WG テーマ推進による評価技術基盤並びに評価戦略構築とケースレポートの作成。 ・情報収集・発信（国際ワークショップ内容のレポートによる発信、シンポジウムの開催）。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 6月5日 プロジェクト全体会議を開催（秋葉原外部会議室 & Web 開催）。 プロジェクト全体及び各 WG の進捗と今後の活動方針・計画を共有し、全体にて承認。プロジェクトを代表しての外部発表予定について情報共有。 ・日本毒性学会学術年会のシンポジウム（6月19日）においてプロジェクトの活動内容を発表。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ ILSI 台湾主催のシンポジウム（7月末）にて発表予定（ビデオ発表）。 ・日本動物実験代替法学会（11月）のシンポジウムにて発表予定。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 国立医薬品食品衛生研究所、独立行政法人 製品評価技術基盤機構（NITE）、アカデミア等の専門家 ・ 関連学会（日本動物実験代替法学会等） ・ ヨーロッパ、アジア等の ILSI 支部 |
| <p>体内暴露予測ワーキンググループ (WG)</p> | <p>食品成分の体内曝露を、動物を用いずに予測する手法の開発推進と現場実装</p> | <ul style="list-style-type: none"> ① 昭和薬科大学山崎研に構築した in silico 動態予測モデルの実装 ② 新規腸管吸収予測ツールの適用性把握 ③ ケースレポート対象化合物の体内曝露予測 | <ul style="list-style-type: none"> ① 山崎研の最新動態予測モデルの精度を更に検証すべく、予測モデル構築過程で活用されなかった新規ヒト動態文献データを収集。解析可能な 20 文献に関して予測を開始。 ② 進捗無し。 ③ 対象化合物のラット血中濃度を in silico 動態予測モデルで算出。文献報告値と大きく変わらないことを確認。 | <ul style="list-style-type: none"> ① 予測精度の更なる検証を 7 月中を目途に進めつつ、動態予測モデルの実装に向けた適用範囲明確化とシステム整備を実施。 ② ①で適用可能/困難な物質の特徴を明確化すべく、食品以外の成分も含めた解析と考察を、8 月中終了目途に実施。 ③ 必要に応じて追加の解析を実施。 | |
| <p>データベース WG</p> | <p>食品成分の既存毒性情報(文献等)を収集、活用し、反復投与毒性</p> | <p>有害性評価支援システム統合プラットフォーム</p> | <p>昨年までに構築した食品成分の毒性試験データベース (176 種) の有用性検証を目的に Read across の予測結果</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 検証結果からみえた注意点、サポートガイド案のまとめ 1 次案作成を、8 月中を目途に作 | |

| | | | | | |
|---|---|--|---|--|--|
| | を予測する手法、システムを開発中。独自に毒性情報を収集することも検討する。 | (HESS) を用いた食品成分毒性試験データベース及び使用ガイダンスを含む毒性予測手法の AAT 参画メンバーへの公開 | と原著論文を用いて POD やターゲット臓器の予測の妥当性検証を実施。本検証結果を踏まえて予測における注意点等をまとめる予定。 | 成。年内を目途にレポートとして取りまとめる。 | |
| ケースレポート WG | NAMs (New Approach Methodologies) を用いた食品成分の安全性評価戦略を具体化させ、体内曝露予測 WG とデータベース WG の活動と協力し、in vitro assay 系を加えたリスク評価戦略を作成し、ケースレポートとして発信する。 | 第 1 弾のケーススタディは「肝障害」をテーマとし、ラット肝細胞を用いた試験から in vitro PoD を求め、評価スキームの妥当性を検証する。 | ヒトでの有害事象およびラットでの肝細胞壊死の報告があり、毒性発現機序が明らかなピロリジジナルカロイドのリデリインを評価対象とした。 不足データを補うことを目的とし、動物実験代替の観点から選択したラット肝株化細胞では、文献報告のラット肝初代培養と比べて代謝酵素活性に違いがあり、評価に十分なポテンシャルを有しないことが確認された。そこで、株化細胞の毒性評価における限界の確認と併せて、上記文献報告の情報を活用し、設定した評価戦略の妥当性を検証することとした。 | In vitro assay 系における有害反応レベル (BMR) を、文献情報を基に設定し、PoD を統計学および数理モデルを利用して算出する検討を開始した。in vivo assay 系においては、単回あるいは短期反復投与試験の LO(A)EL 値を BMR とし、動態予測モデル (体内曝露予測 WG) にて算出した血中濃度を PoD とした。これら in vitro および in vivo PoD を比較することで、評価戦略の妥当性の検証を計画している。 | |
| 企画運営 WG (国際ワークショップ & シンポジウム WG より変更) | 動物実験代替法における各国の技術・規制動向に関する情報を発信することにより、食品業界における代 | 評価技術に関する情報を収集しプロジェクト内へ共有すると共に、プロジェクトの活動内 | 2023 年 2 月 3 日に開催された「ILSI Japan シンポジウム 食品領域の動物実験代替 -現状と動向、未来に向けた取り組み-」の内容をフラッシュレポートとしてまとめた。編集部およ | | |

| | 替法の開発や取り組みの推進を促す。 | 容を学会やワークショップ等を通じて発信する。 | び著者による最終確認が完了し、校了となった。本稿は 2023 年 8 月発行の「イルシー」誌 No. 155 に掲載される予定である。 WG の活動内容をワークショップやシンポジウムの開催運営のみならず、専門家の先生による講演会や内閣府食品安全委員会との勉強会等の企画運営も担うこととした。これに伴って WG 名を AAT プロジェクトメンバーの承認を経て「企画運営 WG」に変更した。 | | |
|----------------|--|---|--|--|--|
| 研究会・部会・委員会・分科会 | 活動ビジョン・ゴール | 年度目標 | 進捗・課題 | 予定・行動計画 | 関連団体等 |
| バイオテクノロジー研究会 | バイオテクノロジーを用いた持続可能な食料の安定供給への貢献を念頭に、バイオテクノロジーの重要性の理解を深め、バイオテクノロジー応用食品・作物・添加物等の安全性・活用に関する調査研究と情報提供を産・学・官連携及び国際的ネットワークを通して推進し、科学的根拠に基づく国 | 1. ERA プロジェクト調査報告（年 4 回） 2. バイオテクノロジー応用微生物を利用して発酵生産された食品・食品添加物等の安全性に関するワークショップ 3. 第 16 回 ISBR（International Society for Biosafety | ① ISBR2023 (4/30-5/4) に 5 名の先生方を、バイテク技術を応用して開発された植物、動物、微生物の最新レギュラトリーサイエンスに関する知見を取得していただくとともに、日本のレギュラトリーサイエンスに関する知見を海外に紹介いただくことを目的に招聘。3 演題のご発表もいただいた。また、ILSI Japan としても GM 植物の ERA に関するパラレルセッションを企画、運営した。 ② 6 月 19 日第 2 回バイオテクノロジー研究会開催。（オンライン・会 | ERA プロジェクト調査報告 No. 64 号のレビュー、監修、印刷。 ERA プロジェクト調査報告 No. 65 号の論文抄録の収集及び事前監修依頼。 ISBR2023 報告書発行へ向けた編纂。 「バイオテクノロジー応用微生物を利用して生産された食品・食品添加物の安全性に関する WS」準備。 | 農林水産省 厚生労働省 内閣府食品安全委員会 環境省 文部科学省 経済産業省 筑波大学環境系 & つくば機能植物イノベーション研究センター (T-PIRC) 明治大学農学部 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 (農研機構) 作物研究部門 |

| | | | | | |
|--|-----------------------------------|--|---|--|--|
| | <p>際的に調和した安全性評価法や活用法の発展に貢献する。</p> | <p>Research)2023 への安全性評価の専門家の派遣</p> <p>4. 遺伝子組換えナタネの ERA に関する研究成果の論文発表</p> | <p>議室 ハイブリッド形式)</p> <ul style="list-style-type: none"> ERA プロジェクト調査報告 No.63 号の発行、No. 64 号の review。 ISBR2023 の報告。ERA 報告書特別号として 2023 年後半に発行予定。 ERA 報告事業レビューアール先生のご退任および後継に関して議論。来年度からの変更を見込む。 「バイオテクノロジー応用微生物を利用して生産された食品・食品添加物の安全性に関する WS」(2022 年 12 月開催)の「イルシー」誌最終原稿確認。5 月発刊。 <p>2023 年度の同 WS の日程が 2023 年 11 月 27 日もしくは 12 月 4 日に絞られたことが報告され、のち、12 月 4 日開催に決定。明治大学中島教授、千葉大学児玉教授参加ご了承。</p> | | <p>横浜国立大学大学院環境情報研究院</p> <p>千葉大学大学院園芸学部</p> |
|--|-----------------------------------|--|---|--|--|

栄養健康研究会

| | | | | | |
|---------------|--|--|--|--|--|
| <p>栄養研究部会</p> | <p>「健康寿命延伸」はグローバルな持続可能な開発目標 SDGs の目標 3「すべての人に健康と福祉を」に合致することから、「健康寿命延伸」をキーワードとした活動を継続</p> | <p>「健康長寿延伸」のための最新のエビデンスを継続して発信していく。</p> <ul style="list-style-type: none"> 公開セミナー(有料)を Zoom ミーティングで 1 年に数回開催する。 | <p>2023 年からは、活動テーマを「健康寿命延伸に向け、各世代で解決すべき課題と対策とは」とし、「世代別の健康と栄養」に関する公開セミナーをシリーズ化して開催する。</p> <p>進捗は、以下の通り。</p> <p>① 6 月 5 日：2023 年第 5 回部会 (Zoom) を開催し、以下の点につ</p> | <p>実績は、以下の通り。</p> <ul style="list-style-type: none"> 第 1 回公開セミナー「健康寿命延伸に向け、各世代で解決すべき課題と対策とは：妊婦・乳幼児編」を 6 月 23 日に開催 (Zoom)。 参加登録数：158 名 (一般企業、大学、学校、医療機関等の | |
|---------------|--|--|--|--|--|

| | | | | | |
|---------------|--|--|---|--|---|
| | する。 | <ul style="list-style-type: none"> ●セミナー参加登録者に対しては、オンデマンド配信を実施する。 | <p>いて意見交換。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●第1回公開セミナー（6月23日 Zoom開催）のZoomホスト・司会等の担当者（最終決定）について。 ●第2回公開セミナー（10月23日 Zoom開催）の進捗状況について。 ●第3回（来年2月）公開セミナーのテーマと講師について。 | <p>非会員の参加登録：約60%）</p> <ul style="list-style-type: none"> ●参加登録者へのオンデマンド配信開始：6月30日（金）～1か月間 <p>計画は、以下の通り。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●第2回公開セミナー「健康寿命延伸に向け、各世代で解決すべき課題と対策とは：小児期編」を10月23日に開催（Zoom）決定。 ●第3回公開セミナー「健康寿命延伸に向け、各世代で解決すべき課題と対策とは：中高年期編（案）」を2024年2月に開催予定。 | |
| GR プロジェクト | 食品・食事の血糖応答性の簡易評価法（GR法）の確立と普及 | GR法の確立・発表論文発表 | 論文投稿準備（英文校正、共著者レビュー） GR法詳細条件の検討 | 論文投稿 GR法に関する討論会の開催 | |
| 茶類研究部会・茶情報分科会 | 茶樹に係わりその成分の世界的な多様さ、飲料その他商品に係わり各種茶成分の機能性、研究・開発・商品化等につき会員相互間の情報交換を深めると共に、外部からも情報を得る。 | — | 特になし | — | — |

| | | | | | |
|---|--|---|--|--|---|
| <p>Project PAN (Physical Activity and Nutrition) “身体活動と栄養”プロジェクト</p> | <p>超高齢化が進む国内において、働きざかりの人々や高齢者の健康維持を支援する、運動と栄養の複合プログラムの開発と実践</p> | <ul style="list-style-type: none"> ➤ ヘルシーエイジングのためのプログラムの開発・普及 ➤ 介護予防教室の開催（自治体、社会福祉協議会、企業） ➤ 地域リーダーの育成（大学、社会福祉協議会、シルバー人材センター） ● 論文等、科学的成果の発信 | <ul style="list-style-type: none"> ➤ 2023年度「すみだテイクテン教室」春教室開催（5/16, 5/23, 5/30, 6/6, 6/20, 6/27, 墨田区総合運動場） ➤ 共同研究に関する論文投稿 ➤ 学会発表演題登録 | <ul style="list-style-type: none"> ● 介護予防教室、地域リーダー育成養成講座の開催 ● 論文投稿 ● 学会発表 | <ul style="list-style-type: none"> ✓ 石巻専修大学 ✓ 鹿児島大学 ✓ 島根大学 ✓ 札幌医科大学 ✓ 東京都健康長寿医療センター研究所 ✓ 国立健康長寿医療センター ✓ 墨田区 ✓ 横浜市社会福祉協議会 ✓ 岩国市社会福祉協議会 ✓ 吉賀町社会福祉協議会 ✓ 津和野町シルバー人材センター ✓ 益田市シルバー人材センター |
| <p>Project DIET (Dietary Improvement and Education with TAKE 10!®) “途上国栄養改善と栄養教育”プロジェクト</p> | <p>途上国、新興国における官民連携の栄養改善の取組み「栄養改善事業推進プラットフォーム」(NJPPP)のプロジェクトとして、工場など職場の栄養改善プロジェクトを東南アジア各国で推進。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ➤ フィリピン：「フィリピンの栄養強化米プロジェクト2022（調査研究）」2024年パリ栄養サミットに向けプロジェクトの総括を実施。 ➤ ベトナム：「ベトナムにおける | <ul style="list-style-type: none"> ➤ 2022年度プロジェクト最終報告書を受領(6/19)。内容確認後、NJPPPに提出。 ➤ 2023年度提案について、打合せを実施していない。 | <ul style="list-style-type: none"> ● 2023年度提案について7月4日に打合せを実施。 ● 早期の打ち合わせを計画。 | <ul style="list-style-type: none"> ✓ Food and Nutrition Research Institute (FNRI：フィリピン食品栄養研究所) ✓ National Institute of Nutrition (ベトナム栄 |

| | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|
| | | <p>る野菜の摂取行動に影響を与える要因調査」ビジネスモデル構築、並びに 2024 年パリ栄養サミットに向けプロジェクトの総括を実施。</p> | | | 養研究所) |
| | | <p>➤ ミャンマー：「完全オンラインによるブロックチェーン技術を応用した職場における栄養教育」栄養教育推進に焦点を当てたビジネスモデル構築に向けた展開を計画。</p> | <p>➤ クーデターによる政情不安が続いており、現地でのプロジェクト展開は厳しい状況。農林水産省とも情報共有している。</p> | <p>● 現地の状況を注視する。</p> | |
| | | <p>➤ インドネシア：「インドネシアにおける健康的な食事の普及に関する調査 2022」ビジネスモデ</p> | <p>➤ 2023 年度実施プロジェクト（ビジネスコンセプトに関する調査「顧客反応、市場分析等」）について、農林水産省を交え、打ち合わせを実施。ILSI Japan の関わり方を検討。</p> | <p>ILSI Japan の関わり方を明確にした後、NJPPP へのプロジェクト提案予定。</p> | <p>✓ ボゴール農科大学（現 IPB Univ.）</p> <p>✓ SUN Business Network Indonesia</p> |

| | | | | | |
|----------------|--|---|---|--|---|
| | | ル構築、並びに2024年パリ栄養サミットに向けプロジェクトの総括を実施。 | | | |
| CHP 全体 | 日本の産・官・学界に蓄積された栄養学、医学、公衆衛生、衛生環境等の分野における科学的知識および技術を、国内および世界的に共通な課題の解決に活用し、SDGsに基づいた社会貢献を行う。 | <ul style="list-style-type: none"> ➢ SUN Business Network Japan (仮称: SBNJ) 事務局機能誘致に向けた活動継続。 ➢ SDGs 貢献プラットフォームの形成。 | <ul style="list-style-type: none"> ➢ SBN と戦略パートナーシップ締結において、活動に制限がかかる母乳代替品 (BMS: Breast-Milk Substitutes) 製造企業に対し、説明会を開催し、締結が承認された。 ➢ 国内セミナーとして、SBN アジア諸国からの活動報告を実施する案を検討。 | <ul style="list-style-type: none"> ● SBN との関係構築を進める。最初の計画として、国内セミナーでの登壇を要請。同時に ILSI Japan の役割も具体化させる。 | <ul style="list-style-type: none"> ✓ Global Alliance for Improved Nutrition (GAIN) ✓ Bill & Melinda Gates Foundation ✓ SUN Business Network (SBN) ✓ World Food Programme (WFP) ✓ アジア開発銀行 |
| 研究会・部会・委員会・分科会 | 活動ビジョン・ゴール | 年度目標 | 進捗・課題 | 予定・行動計画 | 関連団体等 |
| 国際協力委員会 | アジアの ILSI 各支部間の交流による食品法規動向及びリスク評価等の情報収集・共有化と ILSI Japan 関係者への成果報告 | 10月26-27日開催 予定の BeSeTo 会議 (アジア地域 ILSI 支部との情報交換会)への参加、 情報交換 | <進捗> 5/19 に委員会の会合を開催。会議のハイブリッド開催が確定し、より参加しやすい環境となった。参加希望者、及び主催者より提案された各テーマ内での日本からの発表テーマ案 (参加者は各 1 題報告予定) についてアンケートを取ることにした。 なお、前回提示した課題のうち、BeSeTo 会議の新たな名称については | 7月 参加者、発表内容の確定 8月 分担決定、原稿作成開始 9月 原稿作成、完成 10月 ALSIN 会議開催 (台湾) 12月 振り返り | アジア地域の ILSI 支部 |

| | | | | | |
|-----------------------|--|--|--|---|---|
| | | | ALSIN (Asian Life Science Institute Network) となった。 <課題> 1) 議案確定への意見出し 2) 参加者、発表内容の確定 | | |
| 食品機能性研究会・AI栄養・機能性研究部会 | | | | | |
| AI 栄養機能プロジェクト分科会 | 実生活から創出される莫大な量のリアルワールドデータについて、最新のデータサイエンスおよびAI技術を活用し、様々な生活習慣と健康との関係性を解明することで、一人ひとりに適した情報提供を可能とするAIシステムを構築する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・フレイル予測モデル論文化 ・フレイルナレッジグラフ作成 ・ナレッジグラフスキル(育成) ・北大阪健康医療都市(健都)での発信 | <ul style="list-style-type: none"> ○月次運営会議(5/26)、(6/23)を実施し、プロジェクト全体の進捗確認、課題、スケジュールを確認、更新。 ○予測モデルWG、和食WGともに論文化に着手。それぞれ投稿、再投稿、第2弾研究の準備を進めている。 ○フレイルナレッジグラフスキルWGにてデータセットをベースに構造化(ナレッジグラフ化)するスキルを習得。 ○北大阪健康医療都市(健都)での成果発信にむけて、現地打ち合わせ(6/6)。 | <ul style="list-style-type: none"> ○月次運営会議による全体進捗管理。 ○予測モデルWG、和食WGによる論文化を引き続き実施。リモート解析の実現による、解析環境のフレキシビリティ向上を準備中。 ○フレイルナレッジグラフスキルについてはデータセットの構築についての理解と、フレイルを対象としたデータセット作成を課題として実施。 ○北大阪健康医療都市(健都)での成果発信は11月の健都フェスをターゲットに調整、内容の構想を継続。 | 国立健康・栄養研究所(健栄研) |
| AI デイアトロフィ研究部門分科会 | 数千分子種よりなる食品摂取によるヒトの代謝状態を最新のコンピュータ技術と計算科学を活用し、高速で安価に食の機能 | <ul style="list-style-type: none"> ・代謝モデルの領域拡大 ・機能伝達経路のイジングモデル ・AI教育 | <ul style="list-style-type: none"> ○東北大と参画企業による月例の報告会(5/22, 6/19: Zoom)が開催された。 ・5/22の報告会では、AIリテラシーの講義として、AlphaFold2(LocalColabFold)利用環境に | <ul style="list-style-type: none"> ●AIリテラシー勉強会: ・AlphaFold2(LocalColabFold)の操作に関する希望企業への指導が個別に実施される予定。 ●総説論文の作成: | 東北大未来科学技術共同研究センター(New Industry Creation Hatchery Center, NICHe) 東北大大学院農学研究 |

| | | | | | |
|-------------------|--|---|---|---|---|
| | <p>性・安全性を予測するAI システムを構築する。</p> | | <p>ついて説明がなされた。また、作成中のレビュー論文進捗について報告された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 6/19 の報告会では、イジングモデルに関する研究進捗の共有が行われた。 <p>○AI ディアトロフィ研究部門分科会(参加企業で構成)の今期執行部体制として、分科会長：越智(森永乳業)、副分科会長(4社)：舟橋(雪印メグミルク)、吉岡(アサヒクオリティードイノベーションズ)、室橋(ブルボン)、児玉(味の素)となった。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・総説論文第2弾(食品の品質・栄養・代謝におけるAIの活用に関する)を取りまとめており、今期投稿予定。 ●7月の報告会は、東北大NICHe 現地およびリモートのハイブリッド開催を予定。 | 科 |
| <p>情報委員会・編集部会</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・調査・研究活動とその成果の発表 ・科学情報の普及 ・国内外の関連機関との交流・連携 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 活動報告配信(年6回) 2. 機関誌「イルシー」の発行(年4回) 3. 「栄養学レビュー」誌の発刊(年4回)(女子栄養大学出版部との共同事業) 4. 種々出版物発刊のコーディネーター | <ol style="list-style-type: none"> 1. 活動報告 <ul style="list-style-type: none"> ・2023年3,4月分配信(5月)。 2. 「イルシー」 <ul style="list-style-type: none"> ・154号：発行、ホームページ掲載、お知らせメール配信(5/22) ・155号：編集中(2023年8月発行予定) 3. 「栄養学レビュー」誌 <ul style="list-style-type: none"> ・121号：編集中(2023年8月発行予定) ・122号：編集中(2023年11月発行予定) | <ol style="list-style-type: none"> 1. 部会活動報告の配信(1月、3月、5月、7月、9月、11月) 2. 機関誌「イルシー」の発行(2月、5月、8月、11月) 3. 「栄養学レビュー」誌の発刊(2月、5月、8月、11月) | |

【事務局からのお知らせ】

| | |
|-----|--|
| 理事会 | 開催なし。 |
| 事務局 | 6月末にて、事務局長の辻本信晴氏が味の素（株）へ帰任。現 CHP 代表 山口隆司氏が7月より事務局長を兼任する。 |